

小田 迪 夫 著

『説明文教材の授業改革論』

著者は、永年にわたって説明文指導の研究に携わってきておられる。本書は、その研究の一環として、ことに「学習者の言語生活と教材の文体を結び」という視点に着眼し、考究された力作である。

著者は、説明文教材の読みの学習活動が不活発になる要因を、次のように述べられる。「『説明』という表現法すなわち文体（描写体、物語体に対する説明体）の抽象伝達性にあり、しかも、その理解に正確性、論理性を求める読ませ方の形式化、画一化にある」（まえがき）

以上のようなことから、説明文指導のあり方を「ロジック」から「レトリック」という考えに立ち、具体的に次のように提唱されている。

「説明文体をロジック（論理）の展開として見るだけでなく、そのロジックを相手

に伝えるレトリックの面からとらえ、そのレトリックの射程内に読み手を導き入れる指導の方法を工夫すること、それによって、教材の内容と論理とが学習者に生き生きと伝わり、学習者がそれに意欲的に反応する学習活動を実現することができる」（まえがき）

すなわち、硬直化した説明文の授業を活性化するため、レトリックを読みとることを通して、生徒の主体的思考を促し、さらに論理的思考力の養成を目的とされているのである。

本書は、以下の三章から成る。

- I 説明文教材指導の課題と方法
 - II 論理的思考力育成のために
 - III 説明文教材指導の史的考察
- 第I章では、先行研究をふまえ、読者の読みを重視する考え方に立ち、説明文指導

のあり方を考究されている。すなわち、これまでの内容中心主義、知識付与主義からの脱皮を図り、書き手の思考・認識・表現方法に着眼する「レトリックを読む」必要性を論じておられる。第II章では、学習者一人ひとり、意識・思考・伝達の過程で論理的思考を活発に働かせるような場を設定して、論理的思考力を育成することを強調されている。第III章では、大正期から昭和初期における説明文指導の内実、及び「赤い鳥」の説明文体に関する考察が、著者独自のものとして展開されている。

説明文教材の指導と言えば、文章構成読みや、要点把握等が一般的であり、生徒の主体的な読みが育ちにくいとされてきた。著者は、読者の読みの意識を重視し、説明文体をロジックの面からだけでなく、レトリックの面からとらえなおすことで、説明文授業の活性化を考えられた。さらに実践上の課題として、書き手の論理を読み手に伝えるレトリック感受の体験を得させる場の設定を重要視されている。このような広い見識と深い洞察力によって説かれた説明文指導論は、説得力をもって読者に感銘を

与えるに違いない。私自身、この著書に接して、説明文指導のあり方を深く考える機会を得たことをうれしく思った。まさに「授業改革論」というにふさわしい高著である。

(B5判、200ページ、昭和六十一年
二月二十六日、明治図書刊、二六〇〇円)
(中西 淳)